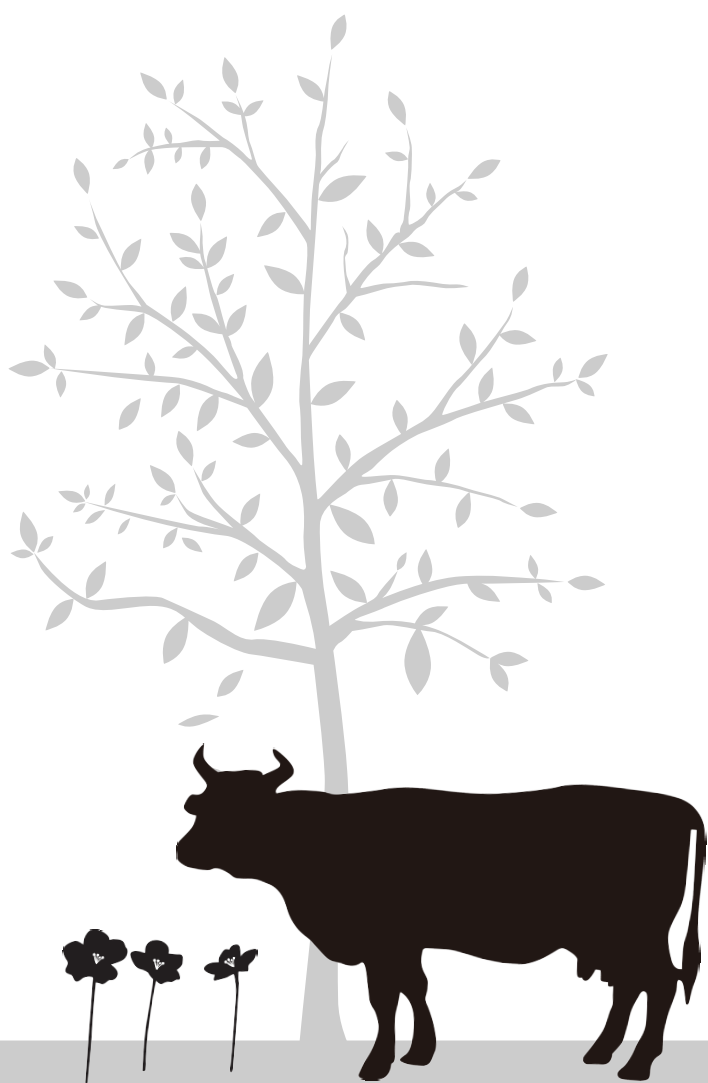


青少年国際交流事業 事後活動推進大会

日本青年国際交流機構第三十回全国大会

第二十一回 青少年国際交流全国フォーラム 北海道大会

△報告書▽



日時：2014年11月22日(土)-23日(日)

会場：定山溪万世閣 ホテルミリオーネ

主催：内閣府

日本青年国際交流機構

一般財団法人青少年国際交流推進センター

北海道青年国際交流機構

## ◇目次

---

1.	大会要綱	2
2.	御挨拶	3
3.	大会日程	8
4.	開会式	9
5.	基調講演	10
6.	分科会一覧	14
7.	懇談会	24
8.	全国物産展	26
9.	表彰式	27
10.	派遣報告	28
11.	事後活動報告	29
12.	閉会式	30
13.	地域理解研修	31
14.	参加者アンケート	34
15.	協賛企業・団体	37
16.	スタッフ名簿	38
17.	大会の記憶	40
18.	最後に	43

## 共生のフロンティア北海道 ～次世代につなごう道産子スピリッツ～



## ◇大会要綱

青少年国際交流事業事後活動推進大会  
日本青年国際交流機構第30回全国大会  
第21回青少年国際交流全国フォーラム  
北海道大会  
開催要項

1. 目的： 内閣府、地方公共団体等の行う青少年国際交流事業の既参加青年が集まり、地域における事後活動の推進状況を報告するとともに、全国的な事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行い、既参加青年相互の交流と研さんを図り、今後の国際交流活動及び地域社会における諸活動の推進に貢献するとともに、国際交流活動を一般の方にも紹介していくことを目的とする。
2. 主催： 内閣府  
日本青年国際交流機構  
一般財団法人青少年国際交流推進センター  
北海道青年国際交流機構
3. 後援： 北海道
4. 主管： 日本青年国際交流機構第30回全国大会北海道大会実行委員会
5. 日時： 平成26年11月22日（土）～23日（日）
6. 会場： 定山溪万世閣 ホテルミリオーネ  
〒061-2302 北海道札幌市南区定山溪温泉東3丁目 TEL：011-598-3500
7. テーマ： 共生のフロンティア北海道～次世代につなごう道産子スピリッツ～
8. 対象者： 内閣府、地方公共団体などが実施した青少年国際交流事業の既参加青年、青年国際交流事業に関心がある方
9. 参加費：

種別	大人(中学生以上)	子ども(3-5歳)	子ども(6-12歳)
A:全日(3人・4人部屋)	16,500	8,250	11,500
B:全日(2人部屋)	18,000	18,000	18,000
C:全日(1人部屋)	23,000	—	—
D:懇親会まで	10,000	6,000	6,000
E:分科会まで	2,000	—	—

## ◇御挨拶

---

内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長  
安田 貴彦

内閣府青年国際交流事業は、我が国の青年リーダーの育成や、青年間の交流を通じた各国との友好親善を図ることを目的として、50年以上にわたり実施されてきました。その一つの大きな成果が、日本青年国際交流機構を中心とした、国内外の大きなネットワークであり、また、各国・各地域で活発に行われている事後活動です。

事後活動推進大会は、年に一度、日本全国から既参加青年が集う機会であり、私は、今回初めて参加させていただきました。大会では、既参加青年との交流や発表を通じて、青年国際交流事業に参加した皆様が、相互に深くつながるとともに、各界や地域で活躍されており、また国際交流や青少年育成など様々な社会貢献活動を活発に行われていることを、改めて強く実感いたしました。今後も、交流事業の充実とあわせ、事後活動を応援してまいります。

本大会においては、「共生のフロンティア北海道～次世代につなごう道産子スピリッツ～」というテーマのもと、基調講演においては、ノンフィクション作家・エッセイストの千石涼太郎氏より、「北海道文化の成り立ちと在り方」の題で講演をいただきました。

その後、9のテーマに分かれて、北海道の歴史・文化の体験、青少年育成や地域活性化の取組などについての充実した分科会が行われました。私も「見て・触れて・楽しむアイヌ文化」に参加させていただき、独特の文化を育んできたアイヌ民族の生活や歴史、文化を学ぶことができました。

懇談会は、北海道らしい趣向が凝らされており、参加した事業、世代、地域の枠を越え、皆が一体となって楽しみ、交流を広げ、深められたと思います。

また、翌日の派遣報告及び事後活動報告においては、皆様が青年国際交流事業に参加された体験や、事業参加後の IYEO での活動で得られたつながりを活かして行われている社会貢献活動や国際交流活動について、素晴らしい報告をいただきました。

最後になりましたが、北海道での全国大会を成功裏に終えられたことを心から嬉しく思いますとともに、本大会開催のために御尽力された渡部実行委員長を始めとする実行委員会の皆さん、北海道青年国際交流機構の方々、北海道及び地元の関係者各位に厚く御礼申し上げます。

参加者の皆様が、過去の先輩方が積み重ねてきた成果を継承しつつ、本大会を通じて、グローバル時代における「共生の精神」について新たな気づきを得、その精神を次世代に伝えていくためにも、更に活発な事後活動を展開し、交流の輪を大きく広げていただけるよう期待いたします。この報告書が、その一助になることを願っています。

## ◇北の大地で学んだ “グローバル時代における「共生の精神」とは”

日本青年国際交流機構会長 佐藤 恵一

「共生のフロンティア北海道～次世代につなごう道産子スピリッツ～」をテーマに、北の大地北海道で開催された日本青年国際交流機構第 30 回の節目となる全国大会でしたが、参加された皆さんにとってどんな大会となりましたでしょうか。ひと足早い初冬の装いの定山溪温泉に集う全国の仲間が、参加事業や世代の垣根を越え、出会いと学びの時間を共に過ごすことができました。その大会が 30 回の節目を迎えられたことは、55 年前から続いている内閣府青年国際交流事業に参加した先輩方々からずっと世代を受け継ぎ、会員一人一人が地域社会や国際社会において事後活動として何をなすべきかを考えて自らが行動し、IYE0 の精神を次につなげようとする熱い想いの証だと改めて思います。

基調講演では「北海道文化の成り立ちと在り方」と題し、ノンフィクション作家の千石涼太郎氏から北海道の開拓の歴史について、異なる文化を持つ人々が共に助け合いながら発展させてきた成り立ちから学び、今も残る様々な文化の生い立ちを紹介いただきました。時間が足りないほどユーモアあふれるお話でしたが、「北海道に来る癖をつけてください」という言葉が心に残りました。

分科会では、アイヌ文化体験、開拓の精神を引き継いでいる地域活性化の取組、更には、自然や異文化共生など 9 つものコースがありました。いずれの分科会も魅力的な内容で、どの分科会にするか選ぶのに迷われた方も多かったようですが、それぞれの分科会を通して、より北海道の文化や共生の精神を理解することができました。更に懇談会では、北の大地の恵みをふんだんにいただきながら参加者間の情報交換が進み、お互いの親睦を更に深めることができました。翌日の国際交流事業参加青年の派遣報告や東北ブロックを中心とした各県の事後活動報告では、事業の成果をどう活かしていくのかと今取り組んでいる地域特性を活かした活動が報告され、来年の IYE0 設立 30 周年に向けて、全国各地での新しい仲間を加えての新たな活動が更に活発になることを期待しています。また、本大会席上、長年にわたり国際交流活動に御尽力いただきましたお三方に IYE0 表彰を授与させていただきましたが、その御貢献に改めて感謝を申し上げ、今後とも叱咤激励をいただきますようお願いをいたします。以上、参加されました皆さんが「共生の精神」をはじめとして、これからの生き方を考える上で様々な気づきと学びをたくさん得られた大会、参加者一人一人が、人財のネットワークを広げ、刺激の多い充実した大会になったと総括させていただきます。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり早くから準備いただきました渡部卓人実行委員長はじめ実行委員の皆さん、御協力いただいた北海道庁、そして大会に関わっていただきましたすべての方々に心から厚く感謝を申し上げます。

皆さん、来年は高知大会でお会いしましょう！

## ◇第 21 回青少年国際交流全国フォーラム 報告書に寄せて

---

一般財団法人 青少年国際交流推進センター理事長  
川上 和久

第 21 回青少年国際交流全国フォーラムは、北海道で成功裏に開催されました。

実行委員会、北海道青年国際交流機構（北海道 IYEO）の皆さんの熱い思いと惜しみない御努力により、国際交流事業既参加者の皆さんの絆と事後活動状況を確認しつつ、相互研さんを図るとともに、世の方々に国際交流事業が如何に意義あるものかを知っていただく良い機会を提供するという所期の目的が、十分達成されるプログラムとなりました。

基調講演では、ノンフィクション作家・エッセイストである千石涼太郎氏に、「北海道文化の成り立ちと在り方」について御講演いただきました。北海道で使われている言葉のルーツを題材にあげ、北海道の言葉の成り立ちが、様々な人が集まって共通する言葉だけが生き残るのではなく、どこかの言葉が北海道の共通語になって発展していると説明され、その在り方を、「グローバル社会で様々な背景の人が個性をいかしつつ共生している姿」と照らし合わせることができました。

また分科会には、北海道ならではの多様なテーマがそろい、内容も講師の皆様からの講演だけにとどまらず、参加型のワークショップにするなどの工夫が施された内容でした。このフォーラムでの成果を皆さんの今後の社会貢献をはじめとする諸活動にいかしていただき、益々御活躍されることを期待しています。

改めて、本フォーラムの実行委員会及び北海道 IYEO の皆さんに深く感謝申し上げますとともに、御支援御協力いただいた北海道をはじめ地元の関係者各位に厚く御礼申し上げます。

また、IYEO 会員の皆さんが、内閣府青年国際交流事業で招へいされた外国青年の「国内プログラム」等を実施する実行委員会で、その中核となって活動されていることに敬意を表しますとともに、今後とも派遣の経験などをいかされてそれぞれの地元、それぞれの分野で国際性に富み、内外に広いネットワークを持つ青年リーダーとして大いに御活躍され、ますます評価を高められることを祈念して、「大会の報告」に寄せる言葉といたします。

## ◇二日間に詰め込んだ北海道らしさ

---

北海道青年国際交流機構

第30回全国大会北海道大会実行委員長 渡部 卓人

日本青年国際交流機構第30回全国大会北海道大会に多くの皆様にご参加いただいたこと、心より感謝申し上げます。

第30回目となる節目の大会をこの北海道で開催すると聞いた時、私は恥ずかしながら事の大きさにピンときていませんでした。今年度から北海道 IYE0 に入った私にとって全てが未知のものであり、全国大会の全容を把握しないまま走り出していたように思います。そんな私が実行委員長として大会を無事終えることができたのは、私を支え導いてくれた実行委員の皆様、北海道・東北ブロックの皆様のお陰です。改めて厚く感謝申し上げます。

「共生のフロンティア北海道～次世代につなごう道産子スピリッツ～」は、北海道に根付く共生の精神こそ参加者の皆様に伝えたい北海道の魅力であると、実行委員一同が話し合いを重ね決定した本大会のテーマでした。基調講演に千石涼太郎氏を迎え、北海道文化の成り立ちと在り方についてお話をいただき、分科会では多方面で活躍する講師の方々に依頼し、北海道で見られる様々な共生の形を表現しました。私たちの伝えたいものがしっかり参加者の皆様に伝わっているか不安でしたが、アンケートの結果や直接のお言葉を聞く限り皆さんに北海道の魅力が伝わったのではないかと思います。共生の形はその地域、場所によって様々です。地域の強みを活かしつつグローバルに活動していく IYE0 の活動は正にその地域に合った共生の形を探っていく行為でもあると考えています。皆さんがこの大会で感じた「共生の精神」がこれからの事後活動を進めていく上での力となっていただければ幸いです。

最後になりましたが、本大会を開催するに当たり御尽力いただいた内閣府、北海道庁をはじめとする関係者の皆様に多大な御協力を頂いたこと、また二日間を全力で楽しみ、たくさんのエネルギーをこの大会に注いでくださった参加者の皆様に厚く感謝申し上げます。そして実行委員と(一財)青少年国際交流推進センターの担当者の皆様本当にお疲れ様でした。皆さんとこの大会を創り上げることができて本当に幸せです。ありがとうございました。

## ◇私たちなりの「道産子スピリッツ」

---

北海道青年国際交流機構

会長 小田 玲実

日本青年国際交流機構第30回全国大会北海道大会は、全国の皆様の御参加、御協力により、大過なく日程を終了することができました。

本大会を開催するにあたり多大な御尽力をいただきました北海道庁、内閣府、IYE0、一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様、遠路はるばる北海道までお越しくくださった参加者の皆様、遠くから激励してくださった各地のIYE0会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

実行委員会では、1年以上前から本大会の準備を行ってまいりました。実行委員一人ひとりが皆さんに伝えたいたくさんの「北海道」を持ち寄り、時間をかけてじっくり煮詰めた、ぎゅっと濃密なプログラムとなりましたが、御参加いただいた皆様には、私たち道産子の持つさまざまな共生の精神をしっかりとお伝えすることができたでしょうか。

全国の会員の皆様には、早くから大会の運営にあたりアドバイスや励ましのお言葉をいただき、実行委員一同大変励みになりました。当日も、大会の円滑な進行、全国物産展などに御協力をいただき、皆様のお気持ちやエネルギーに大変助けられました。分科会でも積極的にロールプレイ等に御参加いただき、講師の方々も有意義な分科会になったと喜んでおられました。

東北ブロックの皆様には、事前準備から当日までたくさんのサポートをいただき、大変嬉しく、心強かったです。大会の準備や当日の運営に際しましては、至らない点多かったと思いますが、何卒ご容赦いただければ幸いです。

広大な大地が魅力の一つでもある北海道ですが、その土地柄中心地である札幌で集まることが多く、遠方の会員は活動に参加しづらい現状がありました。しかし、全国大会実行委員会を立ち上げると、北海道各地、あるいは全国各地の北海道IYE0出身者が手を挙げて下さり、本大会をきっかけに「道産子」一丸となって準備・運営を進めることができました。遠方在住の北海道IYE0会員同志の久しぶりの交流の機会ともなり、今後の活動の原動力になっていくだろうと感じています。

また本大会にて、北海道IYE0の活動活性化や若手育成に長年御尽力くださり、本大会でも実行委員として未熟な私たちをしっかりと支えてくださいました板倉美穂子顧問が、表彰を受けられました。ここ北海道の地で板倉顧問の表彰をお祝いすることができ、私たち北海道IYE0にとって喜ばしい日となりました。

本大会がもたらしてくれた、このような御縁を大切に、今後も北海道IYE0なりの「道産子スピリッツ」で活動を続けていきたいと思えます。

お世話になりました関係者の皆様、参加者の皆様には、重ねて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



## ◇大会日程

### 11月22日（土）大会一日目

時間	内容
12:30	受付
13:30	開会式
14:00	基調講演：「北海道文化の成り立ちと在り方」 講師：千石 涼太郎（せんごく りょうたろう）氏
15:15	記念撮影
15:30	分科会
～	<b>【文化体験】</b>
18:00	A：見て・触れて・楽しむアイヌ文化
	<b>【地域活性化】</b>
	B：ウィンタースポーツの達人が立ち上がる
	C：グローバル時代の地域活性化 ～場所文化をいかした十勝での取組を例として～
	D：滝川から世界へ 世界から滝川へ
	E：地域との共生から生まれる北海道エンターテイメント (講師の都合により中止)
	<b>【共生とESD】</b>
	F：北海道における野生動物の駆除と共生
	G：ポスト「ESDの10年」に向けて ～この場から望ましい未来づくり～
	H：北海道のインバウンド観光を通して見る異文化共生
	I：車いすでつながる想い・未来・笑顔 ～誰でもできる国際貢献の事例として～
	J：エコビレッジに学ぶ持続可能な地域づくり
18:45	懇談会 ※全国物産展を開催
～	
20:45	

### 11月23日（日）大会二日目

時間	内容
9:00	日本青年国際交流機構 表彰式
9:30	各都道府県及び個人の事後活動紹介
11:00	閉会式
11:30～	地域理解研修

## ◇開会式

1日目 11月22日(土) 13:30~14:00 ホテルミリオオーネ ミリオオーネホール

---

### 1. 開会

2. 主催挨拶 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室長 安田 貴彦  
日本青年国際交流機構会長 佐藤 恵一  
一般財団法人青少年国際交流推進センター理事長 川上 和久  
(挨拶代読 理事 坂田 清一)  
第30回全国大会北海道大会実行委員長 渡部 卓人

3. 来賓挨拶 北海道知事室長 窪田 毅

### 4. 来賓紹介

### 5. 閉式



内閣府子ども若者・子育て施策  
総合推進室長 安田 貴彦



日本青年国際交流機構  
会長 佐藤 恵一



一般財団法人青少年国際交流  
推進センター理事 坂田 清一



第30回全国大会北海道大会  
実行委員長 渡部 卓人



北海道知事室長  
窪田 毅

## ◇基調講演

1 日目 11 月 22 日 (土) 14 : 00~15 : 00 ホテルミリオオーネ ミリオオーネホール

---

### 「北海道文化の成り立ちと在り方」

講師：千石 涼太郎 氏  
ノンフィクション作家・エッセイスト

大会開催地となった北海道の文化や開拓の歴史をはじめ、この地に根付く共生の精神について知ってほしいという思いから、地方文化や道民性に詳しく、地域振興にも尽力されているノンフィクション作家の千石涼太郎氏を招いて、「北海道文化の成り立ちと在り方」について講演いただきました。北海道出身で、現在、小樽の観光大使も務める千石氏のお話からは、北海道への深い愛着、そしてその魅力を発信したいという強い思いが感じられました。言葉と文化の密接なかかわり、多文化の受入れに寛容だった北海道の土地柄や気質にも触れる内容は、まさに国際交流で大切にされている「多文化共生」や「地域振興」のテーマにも通じるものでした。

参加者からは、「北海道文化に造詣が深く、関東在住歴も長い千石氏の視点で、北海道の内と外、両面からの魅力が伝わった」などのコメントが寄せられました。以下に、講演要旨を一部紹介します。

#### ●言葉と文化の密接なかかわり

私は物書きですから、文化と言うとまず「言葉」を思い浮かべます。言葉と文化は密接に関わりがありますし、言葉自体が文化であると思います。私が北海道の本を初めて書いたのが 1996 年、道民性や食文化に加え、方言についても書きました。北海道には方言がないと思っている北海道在住の人もいますが、北海道にもそれなりに方言はあります。ただ、面積が広い割には地域の差は比較的少ないほうだとは思いますが。たとえば、北海道の一番東側の半島にある根室と札幌の距離は、東京—大阪間と同じなのですが、東京と大阪はかなり方言が違うのに対し、根室と札幌の人が話をしてお互いに「根室の方言だな」「札幌の方言だな」と感じることはほとんどありません。

北海道には色々な地名があります。アイヌ語が基になったものに漢字を当てているものも多くありますが、本州の方々が移り住んだということが分かる地名もあります。「北広島市」「新十津川村」など、本州の地名がついたところが北海道にあります。こういうところを見ると、北海道の文化が、いかに道外の影響を受けているかが分かります。

北海道で生まれた文化も様々ありますが、言葉の場合は東北から入ってきたものも多いです。例えば、「あめる」は分かりますか？ 最近、20 代の北海道の人に「あめる」が通じなくてびっくりしたことがありました。「あめる」というのは「物が腐る」という意味で、私が住んだことのある岩手の花巻など、東北でも使う人がいます。最近、なぜ使われなくなったのかと考えると、「あめる」こと自体が少なくなってきたからではないでしょうか。

東北と北海道は距離的にも近いので入ってくる言葉も多いわけですが、それだけではないのがまた面白いところです。北海道で野菜のナスのことを「なすび」と言いますが、これは完全に関西から来ています。また、どうにもならない状態を意味する「わや」というのも、関西の言葉です。こうして関西から言葉が入っているのは、大阪からずっと日本海を回って来た、「北前船」の影響が強いのだと思います。北海道には富山から移住した方々もいますから、北陸の文化も北海道に強い影響を及ぼしていますね。北海道では、運動会でビリになると、「げっば」とか「げれっば」と言いますが、富山でも、「げっと」とか「げっぼ」とか似たような方言があるそうです。

いろいろな地域の言葉が入ってきて、共通する言葉だけが生き残るということだけではなく、どこかの言葉が北海道の共通語になって混じり合うこともある。これはまさに言葉だけでなく、文化そのものが混在化している証拠です。皆さんも国際交流をしているので分かると思いますが、国際交流では、皆が同じようになることではなくて、お互いの異なる部分を理解することが大事だと思います。

### ●発展に貢献した多くの力の受け皿として

北海道には旧石器時代から人が住んでいて、今、北海道と北東北には縄文文化を世界遺産にしようとしている人たちもいます。北海道にも縄文時代、続縄文化があり、擦文文化あるいはオホーツク文化を経て、アイヌの時代が来ます。アイヌは狩猟民族ですが、実は海洋民族でもありまして、他国と交易をしていました。13世紀に入ると和人、本州の人間が移り住んで来ました。特に16世紀、江戸時代にどんどん入ってきます。幕末には北海道にアイヌが2万人いなかったと思いますが、和人が6万人住んでいたと聞いています。明治維新後に入ってきた人ばかりかという意外とそうでもなく、江戸時代には、場所請負人という海辺の網元やニシン漁などの元締めのような人々もいました。

そして、明治維新が起こります。北海道に開拓地ができたのが明治2年で、明治4年に札幌に開拓使庁ができると、北海道には本州の人間だけでなくお雇い外国人が結構来ました。ホーレス・ケプロンという米国人が、いろんな人を連れてきたのですが、その一人が有名なクラーク博士です。クラーク博士が札幌にいたのは確か8か月、教えた学生は20人もいなかったそうですが、銅像になって、いまだに尊敬されたりするのは、彼が農業のことを教えたというよりは、武家の縦社会ではない精神的な考え方を教えたからではないでしょうか。キリスト教の精神なのでしょうが、「紳士たれ」という自主独立の精神、自由はあるが自分で考えろ、という教えが北海道開拓とあいまみあって北海道に根付き、宝になったのだと私は思っています。ケプロンのほかに大きな功績を残したのは、地質調査のベンジャミン・スミス・ライマン、石炭輸送の鉄道建設に貢献したクロフォード、畜産農業で尽力し競馬場も作ったエドウィン・ダンなど。また、アンチセルは、野生のホップを発見し、その栽培をベイマールという人が成功させ、札幌開拓使ビールが生まれました。今のサッポロビールの前々身と言いましょか。日本のビールの発祥は北海道ですからね。よくヨコハマ・ブルワリーが発祥だとか言われますが、あれは外国産で、日本独自のホップを使ったという意味では北海道だと私は思っています。北海道はお雇い外国人の方々の力をたくさん借りた土地だと思います。確か4年間で78人ほど、多くの方が北海道の発展に貢献しています。外部の力を取り入れる受け皿として発展してきた北海道には、そういうオープンな気質が今も残っていると思

ます。

その後、明治 8 年に北海道開拓やロシアの脅威に対する防衛のために屯田兵がやってきました。最初は旧幕軍の下級武士でしたが、同時に武士ではなく屯田兵でもない一般の人たちも入ってきました。地震や洪水など自然災害で村がなくなり、本州から移住した集団も少なくなかったと聞きます。集治監、いまでいう刑務所の囚人（その多くは旧幕府軍に危険分子と見なされ捕えられた政治犯）が、強制労働させられ、道路工事をさせられた歴史もあります。

このように北海道には、外国人、無理やり連れてこられた人、事情があって移住した人、夢や一攫千金を狙って財を成した人など、いろいろな人たちが作ってきた文化があるのです。

### ●北海道人の気質——不器用な一面に隠れた優しさ

今日皆さんを出迎えた全国大会実行委員の方々には、海外に行き交際する方々から、きわめて社交的だと思えますが、一般的な北海道の人は、気持ちはオープンでも態度はあまりオープンに見えず、初対面に弱い面があります。「お客さん来ちゃった」って戸惑ってしまう飲食業とか。親しくなるとすごく良いのですが、それまでは難しいところがあります。通勤族の中には、「(北海道人は) なんてっつけんどんなんだらう」と思う方がいます。正直で、お世辞が言えないのです。例えば、東京から札幌に単身赴任した支店長などの偉い方が、晩御飯は家で作らず仕事帰りに部下を連れて馴染みの店でビールでも飲もうということがあります。そこで出てきた料理に対し、部下が言ってしまうんです、「これうまくないね」って。「この百倍うまいところがありますから、今度一緒に行きましょう」と。お店の人にも聞こえるような大きな声で、正直に「うまくない」と上司の顔もつぶすようなことを言うのは、本当は、三、四年しかいない上司に一刻も早くおいしいものを食べさせてあげたいという優しい気持ちからなんです。

北海道に来て六年間、道民には優しさやおもてなしの心が伝わるように話していますが、同時に「この優しい気持ち、分かってやってください」と、叫び続けています。北海道人の真の気持ちは本当に良くて、私はダイヤの原石、だからもっと磨きましょうと言っているのですが、なかなか難しいところです。

北海道は本来、いろいろな地域から出てきた人の共同体意識を持って助け合おうという気持ちや優しさに溢れた地域です。それを御理解いただきたいです。

### ●開拓者精神の再興

一時期、ずっと根付いてきたフロンティアスピリットがだんだん失われ、開拓者精神がある人がどんどん北海道を離れてしまうという、悲しい何十年間がありました。最近はまだだんだんと変わってきたように思います。いろいろなチャレンジをする人が出てきています。赤平市の民間でありながら、植松電気はロケットを作っています。また、日本の地方では赤字路線と言われることの多いローカルバスですが、十勝バスは黒字を出しました。そのほか、パッシブホームには、パッシブ技術という自然の力をうまく取り入れた換気システム（床下冷暖房エアコン一台で、月一万円ちょっとの暖房費ですべての部屋が暖まる省エネシステム）を、ハワイやモンゴルなど暖かい地方にも広めようと世界中駆け巡っている川多さんという社長さんがいます。このように、いろいろな人たちが出てきて活躍してくれると嬉しいです。

私は今、町おこしの一環で住民の方々に本を書いてもらうという「らんこし作家デビュー・プロジェクト」の審査員やアドバイザーをしています。その仕掛け人の一人に、道外からの移住者が入っています。北海道は昔から、外部の人たちと交じり合って力を発揮していくのだと思います。このところ、ちょっと閉鎖的になってきつつあるところも否めませんが、これからは逆に北海道からいろんな文化を発信したいと考えています。

### ●著書『竹鶴とリタの夢 余市とニッカウヰスキー創業物語』と今後

これからもっともっと北海道の良さをPRしていきたいと思います。道外からいらした方には、これを機会に北海道に遊びに来る癖をつけながら、移住を考えていただけるとうれしいですね。私は34年ぶりくらいに戻ってきましたが、北海道はとても暮らしやすいですし、人間が温かいです。北海道の魅力の半分は道産子だ！と私はずっと言っていますが、これから磨けば伸びしろがたくさんある大地ですので、ぜひこれをまた機会に来てください。

最後に、北海道が作った文化の一つであるニッカウヰスキー。私はこの本を書くために広島や大阪に取材に行ってきました。NHK 朝の連続テレビ小説でもおなじみ、昭和初期に竹鶴政孝さんがニッカウヰスキーを作ったお話ですが、今の北海道にはこういう方々が本当に必要です。著書の中で、竹鶴さんが幼少期の頃からどんなふう成長し功績を残したかを追っていますので、ぜひこれを読んで、この中から「私が第二の竹鶴になるんだ」という方が生まれるといいなと思っています。また海外で勉強された方々にも北海道に残っていただけたら嬉しいです。

今後も皆様が地元に戻られて大いに活躍され、併せて北海道もPRしていただけたらと思います。ありがとうございました。



## ◇分科会一覧

テーマ	分科会名	内容
文化 体験	A：見て・触れて・楽しむアイヌ文化	アイヌ語で「札幌の美しい村」という意味を持つ「サッポロピリカコタン」を訪問し、独特の文化を育んできたアイヌ民族の生活や歴史、文化などを学び、理解を深めます。
地域 活性化	B：ウインタースポーツの達人が立ち上がる	教育機関や行政と一緒に活動する「北海道スノースポーツミーティング」。プロスキーヤーたちが子どもたちの授業にお邪魔する「雪育せんせい」などのユニークな活動についてお話しいたします。
	C：グローバル時代の地域活性化～場所文化をいかした十勝での取組を例として～	真冬に収穫できるマンゴーの栽培を手掛ける「ノラワークスジャパン」などを運営する後藤さんより、地域活性化のための新産業の創生への取組についてお話しいたします。
	D：滝川から世界へ 世界から滝川へ	滝川市全体で推進する国際化の音頭を取っている滝川国際交流協会が行う外国人の技術研修生受入れやJICA事業への協力といった様々な活動についてお話しいたします。
	E：地域との共生から生まれる北海道エンターテイメント	「クリエイティブオフィスキュー」の代表取締役/プロデューサー鈴井亜由美さんの北海道から生まれるエンターテイメントについてお話しいたします。（講師の都合により中止）
共生と ESD	F：北海道における野生動物の駆除と共生	地理情報システム（GIS）を用いた適切な野生動物管理を提唱している金子教授から大学での取組を始めとした様々な活動事例についてお話しいたします。
	G：ポスト「ESDの10年」に向けて ～この場から望ましい未来づくり～	ESDのこれまでを振り返りながら、サステナブルでフェアな社会を各々の地域からつくりだしていくにはどうしたらよいか、一緒に考えます。
	H：北海道のインバウンド観光を通して見る異文化共生	中国及び中国語圏の方々をターゲットにオーダーメイドの北海道旅行を提供し、北海道の様々な魅力を伝えている石川さんよりそれらの取組についてお話しいたします。
	I：車いすでつなぐ 想い・未来・笑顔 ～誰でもできる国際貢献の事例として～	日本で使われなくなった車いすを集め、心をこめて整備をし、旅行者の手荷物として主に発展途上国の障がい児・者に届けるという活動をしている「飛んでけ！車いす」の会のユニークな活動内容についてお話しいたします。
	J：エコビレッジに学ぶ 持続可能な地域づくり	世代を超えた人が繋がることで文化的な交流が起き、新たな気づきが得られるというエコビレッジ。その魅力について坂本さんからお話しいたします。

## ◇分科会 A 「見て・触れて・楽しむアイヌ文化」

1 日目 11 月 22 日 (土) 15:30~ / 札幌市アイヌ文化交流センターサッポロピリカコタン

●講 師： 門脇 こずえ氏 (札幌市アイヌ生活相談員)

●参加人数： 27 名

担当：菅原 桂子、本間 麻友

定山溪温泉から車で5分ほどの場所にある札幌市アイヌ文化センター(ピリカコタン)において、北の大地に先住し独特の文化を育んできたアイヌ民族の生活や歴史、文化などを楽しみながら学び理解を深める素晴らしい機会となりました。

展示室には北海道アイヌ協会札幌支部の皆さんが復元製作した民具約 300 点が展示されていて、参加者は木綿でできた衣装や木の繊維を織り上げた衣装などを実際に触って感触を確かめ、今も伝統文化を守り、自然を大切にするアイヌ民族の心と、新たな創造を目指すエネルギーを直に感じとっていた様子でした。



屋外では、昔アイヌ民族が住んでいた家屋(チセ)や小熊の飼育おり(ヘペレセツ)、倉(プ)などを見学し、11月の寒さが増した夕暮れ時ということもあって、アイヌ民族が大自然の中で暮らしていたことを体感することができました。

施設の見学を終え、美しいアイヌ伝統衣装やタペストリーが飾られた交流センターの中で、アイヌ文様の切り絵体験をしました。アイヌの文様は、アイウシ(矢・トゲがある)やモレウ(ゆるやかに曲がる)、シク(目)など一つ一つに意味があり、その文様を組み合わせることでできています。民族衣装には開いている部分、すなわち袖口や首元、すそ、胸元、背中に文様が刺繍してあり、それは、開いている部分から病気や魔物が入らないようにという魔除けの意味があるということを知り、美しさの裏側にある奥深さを感じることができました。

実際に、一人ひとり折り紙を使って切り絵を作成し画用紙に貼ったり、模造紙に描かれたアイヌの着物に文様を貼り付け全員で一つの作品を作り上げる作業に1時間ほど熱中しました。伝統を感じながら、自らの手で文様を作り上げる体験に参加者全員満足した様子で、ピリカコタンをあとにしました。





## ◇分科会 B 「ウインタースポーツの達人が立ち上がる」

1 日目 11 月 22 日 (土) 15 : 30 ~ / ホテルミリオーネ ななかまど

●講 師 : 井山 敬介氏 (北海道スノースポーツミーティング実行委員会)

●参加人数 : 17 名

担当 : 鹿野 芽衣、石井 晴子

北海道といえば、「雪」をイメージする人が多いのではないのでしょうか。分科会 B ではウインタースポーツを通して、雪の魅力に気づかせ、さらには北海道の魅力も発見してもらおうという活動「雪育 (ゆきいく)」を行っている、プロスキーヤーの井山敬介さんにお越しいただきました。「スキーをしたことがありますか」という質問に全員が挙手し、井山さんが驚くという、和やかなムードでお話が始まりました。

前半は、北海道のスキー授業の現状や「雪育」を始めたきっかけを、映像と共にお話ししてください、小学校出前授業を参加者が体験するなど、参加者を交えて楽しく進んでいきました。井山さんは「子供たちに、雪が好きな人？と質問すると半分も手が挙がらない…」と言います。

「スキーの魅力を伝える前に、雪の魅力を伝えなきゃ！」そう思ったそうです。世界でも降雪量が NO.1 の札幌。世界も羨むパウダースノー。「世界で一番なんだ！」そう思うだけで、なんだか雪が、北海道が、誇らしくなってくる子供たち。こんなふうに、身近すぎて気が付けなかった雪や北海道の魅力を再発見させていくとのこと。そこから、自分の住んでいる場所の価値を上げていってほしいという想いもあるそうです。

札幌のたった一校の出前授業から広がった活動が、現在は札幌市内の小学校で使用するためのスキー教材 DVD を作成することになったそうです。そして、なんとその教材 DVD『雪で育つ さっぽろっ子』を見せていただきました！クイズを通して新たな発見をするとともに織り交ぜられた笑いに、参加者全員が授業を受けている子供のように楽しくしっかりと鑑賞させていただきました。

後半は、雪に関するクイズ大会が行われ、急遽景品を用意したものの、残念ながら全問正解者は現れず。そこでじゃんけん大会も行うことになり、井山さんとアイコになった二人に景品が渡されました。AIR-G でラジオ番組をお持ちで DVD の作成もされている DAIGO さんも同席され、さらにスキージャンプの高梨沙羅選手のコーチである山田いずみさんが顔を出してくださいなど、なかなか出会うことのできない方々との貴重な交流の機会となりました。最初から最後まで質問のやまない、講師と参加者の距離が近い学び多い分科会でした。



## ◇分科会C 「グローバル時代の地域活性化

### ～場所文化をいかした十勝での取組を例として～

1日目 11月22日(土) 15:30～ / ホテルミリオーネ 大雪

●講師： 後藤 健市氏(株式会社 プロット アジア アンド パシフィック会長)

●参加人数： 21名

担当：佐野 美恵子、中島 遥香

北海道十勝をはじめアジア各地やハワイにも活動の場を広げ活躍中の講師の後藤さんは、“場所文化”という言葉を作り出し、その場にある・その場にしかない資源を見出すとともに付加価値をつけて広く発信し続けています。その中に、十勝の自然エネルギーを使い「クリスマスの頃に出荷するマンゴー」、視界が開けている山頂で景色を楽しみつつお茶の時間を過ごす「天空カフェ」、雪原の真ん中で楽しむ「スノーフィールドカフェ」などを企画しています。

参加者の皆さんには、5人×4グループに分かれ、地元市町村の「宝」は何ですか？都道府県の「宝」は何ですか？国の「宝」は何ですか？と投げかけられた質問に答えて考えたものをグループでまとめたうえで発表していただきました。各地の観光資源、文化などの物的財産、人的財産が次々と挙げられ「宝」を再認識し、それを活かして地域活性化するためのワークショップとなりました。さらには「お金」をどこに使い、どこには使わずに物事を運ぶか、に話が進みました。人・物・金の順に大切と言われつつも実際は金・物・人の順にしか目が向けられない現実を打開し、自分一人だけの活動でも歩み続けるうちに3人8人20人と仲間が増えていくことが大切であると結ばれました。

また、後藤さんは福祉の分野での活動もされていて帯広市の北海点字図書館の元館長でもあり、「名刺に点字を入れてみませんか。視覚障がいの方にお渡しするためではなく、ちょっとカッコいいでしょ！」と肩ひじ張らずに行動する大切さにも触れていただきました。

地域活性化のみならず活かせる技をたくさん分けていただきました。



## ◇分科会 D 「滝川から世界へ 世界から滝川へ」

1 日目 11 月 22 日 (土) 15 : 30 ~ / ホテルミリオオーネ はまなす

●講 師 : 山内 康裕氏 (一般社団法人 滝川市国際交流協会理事)

●参加人数 : 15 名

担当 : 西條 美雪、竹花 美恵子

会場に入ると同時に、配布資料とともに滝川市の銘菓である「モンモオ」と「滝川旅情」が講師の山内さんから参加者全員に配られ、和やかな雰囲気分で科会が始まりました。滝川市は人口約 4 万人。この規模の市に職員 12 名を抱える国際交流協会があるのは大変珍しいそうです。現在、滝川市では各国からの研修員や国際交流員、ALT 等が地域に溶け込み、市民による海外視察等が盛んに行われています。滝川市が地域文化として「国際協力」を取り入れ、地域の活性化に活かしていくまでの事例を参考にしながら、全国各地の IYEO や地域の国際交流活動に従事している参加者が、各地の取組や課題について活発に議論する分科会となりました。

一般社団法人滝川市国際交流協会は、現在、姉妹都市であるスプリングスフィールドへのジュニア大使訪問団、スーパーイングリッシュランゲージハイスクールへの指定 (滝川西高校)、スーパーグローバルハイスクールへの応募、ALT による活発な市民との国際交流活動、JICA の地域別研修の受入れ、市民による現地視察派遣などを積極的に行っています。しかしながら、平成 2 年に滝川市国際交流協会が発足した当初はこうした活動への理解は全くなかったそうです。山内講師のお話から、25 年にわたる活動の中で、常に「国際交流を活かして地域を活性化していくには?」「国際交流活動の経済効果や人材育成効果をどのように説明できるのか?」という問いと情熱をもちながら、行政や市民の皆さんを巻き込みながら地道な活動と実績を重ねてきたことが伝わってきました。

参加者とのフリートークでは、上記のような経済効果や費用対効果をどのように示せばより理解を得られるのか、国際交流活動の継続に伴う世代交代の問題、多文化共生、移民の子供の教育問題などが多くの事例と共に話し合われました。国際交流のための国際交流ではなく、そこから一歩踏み出して、よりよい社会を創り出すための施策として国際交流・国際協力をやっていきたいという講師・参加者の思いを感じる熱い分科会となりました。



## ◇分科会 F 「北海道における野生動物の駆除と共生」

1 日目 11 月 22 日 (土) 15 : 30 ~ / ホテルミリオーネ 石狩・洞爺

●講 師： 金子 正美氏 (酪農学園大学教授)、他学生 3 名

●参加人数： 20 名

担当： 畠山 真次、田名邊 由美子

現在北海道では野生動物によって様々な被害が起きています。中でもエゾシカによる農業被害額は約 60 億円となっており、見過ごせないものとなっています。しかし、北海道はただ駆除するだけではなく、共生することを目指しました。そこで今回は、北海道の環境に詳しい酪農学園大学の金子正美教授と、狩猟免許を持っている学生の方をお招きし、お話を伺いました。

金子教授のお話は、初めて聞く方にも「なるほど」と理解しやすいもので、中でも GPS を用いたエゾシカの管理というお話が分かりやすかったです。最近では GPS の普及が進んでおり、携帯などにも使用されています。その GPS をエゾシカに取り付けることによって行動範囲を調べることにより、鹿が農作物を荒らさないように柵で囲って効率よく対策するという、とても画期的なアイデアを紹介いただきました。

金子教授のお話の後に、学生の方々から鹿角細工を教わりました。作業の間にエゾシカの様々な利用についてお話をさせていただいたり、参加者が積極的に質問したりと、常に賑やかな交流となりました。今回の鹿角もその一環で、他にも鹿の皮をなめして衣服に、食肉にといったことがあげられ、懇談会ではエゾシカの料理が出るということで、参加者は楽しみにしている様子でした。質問などで盛り上がりすぎてしまい、鹿角のアクセサリーを完成することができなかった人もいらっしゃいましたが、皆様に満足してもらえたようで、とても笑顔が多かったのが印象的でした。



## ◇分科会 G 『ポスト「ESD の 10 年」に向けて

### ～この場から望ましい未来づくり～』

1 日目 11 月 22 日（土）15：30～ / ホテルミリオーネ 浦島

●講 師： 小泉 雅弘氏（NPO 法人 さっぽろ自由学校「遊」）

●参加人数： 19 名

担当：岡田 朋子、小林 有里

市民のための学びの場を提供する NPO 法人さっぽろ自由学園「遊」の小泉 雅弘さんを講師に迎え、ESD（Education for Sustainable Development）について参加者全員で考えました。

まずは参加者の自己紹介を行いました。ESD について、ほとんど知らないという方、深く認識されている方、中には職業で実践されている方までいらっしゃいました。

前半の小泉講師からの ESD についての講義では、「豊かさ」とは何かを各々考えるところから始まり、“Sustainable Development” とはどのようなことか、またその実現のために必要な「教育」とはどのようなものを学びました。開発に対しての一人一人の意識を変えるには「教育」を捉え直し、銀行型教育ではなく課題提起型教育によって市民力をあげることが重要となります。「国連 ESD の 10 年」の最終年を迎え、更なる ESD の普及のために市民がこれを地域や自分自身で実践していくことが望まれます。

後半のワークショップでは、持続可能な社会を作るためにすぐに解決すべき問題を一人ずつ挙げていきました。教育、若者の就労、環境そして IYEO に関する問題まで多種多様な問題が挙げられました。その後グループを作りその問題のキーパーソン及びどのように働きかけるかをディスカッションし、最後に各グループより発表を行いました。参加者が挙げた多様な問題を体系的に捉え、それぞれの立場から意見を出し合う過程は、まさに先生も生徒もいない、お互いの意見から学び合う ESD の現場となりました。



## ◇分科会 H

### 「北海道のインバウンド観光を通して見る異文化共生」

1日目 11月22日(土) 15:30～ / ホテルミリオーネ あかしや

●講師： 石川 めぐみ氏（株式会社 北海道藍天旅遊社 代表取締役）

●参加人数： 24名

担当：板倉 美穂子、上谷 純子

講師の石川さんは、中国語圏の旅行を数多く受け入れるほか、中国客接客コンサルティング、通訳、翻訳など広く北海道と中国を結ぶ業務を行っていらっしゃいます。

近年増え続ける、中国、東南アジアからの訪日客の現状、それに伴う異文化摩擦について、お話を伺いました。中国、タイからの旅行客は、前年対比50%を超えており、最近は団体客から個人旅行が増えています。食事内容、トイレの使い方等、行動様式の違いが無用な摩擦を引き起こすこともあるとのこと。

その後、グループに分かれて、実例から解決策を探るケーススタディタイムでした。服を脱いで温泉に入れない、神社見学は宗教上できない、信号を無視しての道路横断などの旅行客にどう対応するかを、寸劇で披露しました。さすが IYEO 会員。短時間にまとめて発表し、講師の石川さんからも「早速、次の機会に参考にします」とお褒めの言葉をいただきました。摩擦を乗り越え、相互認識を持った共生について、理解を深める分科会となりました。



## ◇分科会Ⅰ 「車いすでつなぐ想い・未来・笑顔

### ～誰でもできる国際貢献の事例として～

1日目 11月22日(土) 15:30～ / ホテルミリオーネ 蓬萊

●講師： 樋口 歩氏 (認定NPO法人 「飛んでけ! 車いす」の会)

●参加人数： 16名

担当： 矢野 葉子

初めに、講師の樋口さんから「飛んでけ! 車いす」の会が発足した経緯、活動内容など画像をおりませながら話を伺いました。日本で使われなくなった車いすを集め、たくさんのボランティアが心を込めて一つ一つ整備をし、それを旅行者の手によって主に発展途上国の障害児・者に届けるという話は、海外での様々な活動経験があり国際交流に関わってきている参加者の心を強くひきつけました。

次に三つのグループに分かれ、講師と同行の方の3名それぞれに、実際に車いすを届けた際の映像や写真を見せながら、その時に感じたこと、思ったことなど実体験を具体的に語っていただきました。ベトナム、カンボジア、タイなどで実際に車いすを受け取り嬉しそうに乗っている子供の姿、それを温かいまなざしで見つめている家族の姿などが次々と映像で映し出され、自分が子供たちに届けたような気持ちになりました。また、小グループで話を聞いたので、ざっくばらんに講師に質問したり、用意していただいたベトナムやカンボジアのお茶やお菓子なども美味しくいただきながら和気あいあいとした雰囲気でも話を聞くことができました。

その後、3台の車いすの整備を参加者全員で行いました。使わなくなった一つ一つの車いすをできるだけきれいにして利用者に届けるために、車いすを磨くポイントやタイヤの点検の仕方を教えていただきました。たくさん磨くと輝きが蘇って「おおっ!」と歓声をあげ、ごみがたまりやすい部分に一心不乱に歯ブラシでごみをそぎ落としていた参加者もいました。

最後に実際に車いすに乗って動いてみたり、介助者として車いすを押したりしました。会場内の少しの段差でも操作が難しくなることを実際に体験し、道路などが未舗装の発展途上国での車いす操作の苦勞を共感することができました。

参加者の中には、福祉施設に勤務している方、理学療法士の方や旅行会社関係の方もいて講師の方を交えながら「飛んでけ! 車いす」の会の活動がより活性化できるようにお互い情報交換などもし、充実した内容の分科会となりました。



## ◇分科会 J 「エコビレッジに学ぶ持続可能な地域づくり」

1日目 11月22日(土) 15:30~ / ホテルミリオーネ しらかば

●講師： 坂本 純科氏 (NPO 法人 北海道エコビレッジ推進プロジェクト理事長)  
笠 小春氏 (余市ハル農園主宰)

●参加人数： 20名

担当：本田 光、近藤 麻子

初めに、北海道内の余市町で北海道エコビレッジ推進プロジェクトから委託されて行っている余市ハル農園の笠小春さんよりお話ししていただきました。農園の管理を委託されてから果樹管理の方法やタイミングについて学ばれNPO 会員や作業ボランティア、学生など、多くの人や農業者とのつながりを大切にされながら活動されています。ブルーベリーとブドウなどの果実、野菜は無農薬で栽培し、他の果物はできるだけ合成農薬を減らして育てられるなど、農園での暮らしや労働から、自らの気づきや学びを得られるような体験プログラムやワークキャンプを展開し、食糧生産の現場として、学び・気づきの場として、地域や人のつなぎ役となるような農園を目指し、田舎での自然的な暮らしの魅力を御紹介いただきました。

NPO 法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトの坂本さんは、エコビレッジの取組を普及啓発するために、環境負荷の少ない技術の実践や、地域の自立を支える経済について研究を重ねておられ、持続可能な暮らしとコミュニティを具体的にデモンストレーションし、広く学びや情報発信の機会を創るための活動についてお話いただきました。エコビレッジライフ体験塾では食と農、住まいやエネルギー、地域経済など「持続可能な暮らしと社会づくり」について包括的に学ぶことを目標とされ、地域の資源を最大限に生かし、地域の生産者や団体と連携して幅広い体験プログラムを提供するとともに、高校や大学、企業などのグループや宿泊滞在型の研修など多様な学びの場を提供されています。

また、食ビジネスやエコツーリズムなどの事業化によって、エコビレッジの担い手、田舎に移住して本格的に農的暮らしをしたい人の仕事を創るため、各種起業を試み、都市からの来訪者だけでなく、二地域居住や季節移住などで農業に関わる人が増えることで、農村が活性化するよう努力をされています。またニュージーランド、アメリカ、ヨーロッパ各地、オーストラリアなどの実際のエコビレッジの例をあげながら、エコビレッジの魅力をプロジェクターを使って御紹介下さいました。日本でのエコビレッジ普及への熱い思いと地域との繋がりの大切さをお聞きすることができました。





## ◇懇談会

1日目 11月22日(土) 18:45～ / ホテルミリオーネ ミリオーネホール

---

司会：池田 誠

### 1. 開会の挨拶

2. 乾杯の挨拶 第30回全国大会北海道大会実行委員長 渡部 卓人

3. 余興 「Yosakoi ソーラン演舞」 藍～教育大&タカネ工業～

### 4. 御歓談

### 5. 全国物産展の御案内

### 6. 次回全国大会のPR

7. 閉会の言葉 北海道青年国際交流機構会長 小田 玲実

懇談会では北海道の食材を使用した豊富なメニューに加えてエゾシカの肉を参加者の皆さんに味わってもらおうと用意され、エゾシカを食べるのが初めてという人に喜ばれました。余興ではYosakoi ソーランの演舞が藍～教育大&タカネ工業～の6名の有志により披露され、北海道ならではのYosakoiの元気な踊りに会場も盛り上がりました。全国物産展コーナーでは多くの方から物品の寄付をしていただき、様々な地域の珍しい物産を手に入れるのに大いに賑わいました(売上報告は26ページを参照)。また最後に来年開催の高知県IYEOの実行委員から参加者へ熱いメッセージが送られ大盛況の中終了しました。





## ◇全国物産展

1日目 11月22日(土) 18:45~ / ホテルミリオーネ ミリオーネホール

担当：佐野 美恵子、小林 有里、上谷 純子

- 売上金額 : 128,028 円
- 使途内訳 : 60,000 円 (IYE0 東日本大震災復興支援募金寄付)  
68,028 円 (全国大会運営資金)

毎年恒例となった全国物産展には、会員の皆様より日本各地及び世界各国の名産品が寄せられました。船のOB・OGの方々にとっては懐かしのにっぽん丸アメニティグッズや、ロシア・タイなどのお土産、日本各地の希少な品から有名で手に入りにくい品まで、実に多種多様でIYE0全国大会ならではの特色あるものばかりでした。お預かりした品は、一度に並びきらなかったため次から次へと陳列しながらの販売となりました。



販売に当たっては、売り手と買い手が価格を楽しく決めて購入していただく形式をとりました。山口県 IYE0 の中野氏がこのやり取りの中心となってくださいました。軽妙なトークと商品説明には定評があり、全国大会名物として心待ちにされている方も多かったです。

物品の提供をしてくださりました皆様、購入してくださった皆様、大変ありがとうございました。浄財は、東日本大震災復興支援募金に寄付させていただくとともに、一部を今回の全国大会の運営資金として活用させていただきましたことを報告いたします。



## ◇表彰式

2日目 11月23日(日) 9:00～ / ホテルミリオーネ ミリオーネホール

### 平成26年度 表彰者

	所属	氏名	参加事業他
1	北海道	板倉 美穂子	第9回青年の船(1975)
2	福島県	佐藤 周一	第18回日本青年海外派遣 北欧(1976) 第3回国際青年育成交流事業(ヨルダン) 団長(1996)
3	沖縄県	豊川 博史	第14回日本・韓国青年親善交流事業(2000)

IYEO表彰は、平成16年2月29日に制定された日本青年国際交流機構規約第20条の規定及びIYEO表彰規定に基づいて行われています。

都道府県青年国際交流機構の会員又はIYEOに長年にわたり継続して協力してくださった方、もしくは団体で、以下の活動項目に当てはまり模範となる活動及び行為をされてきた方が表彰者として選ばれています。

- ①地域の国際化及び活性化に資する活動
- ②国際交流及び国際協力に資する活動
- ③青少年及び次世代の育成に資する活動
- ④日本青年国際交流機構の組織活性化に資する活動
- ⑤幹事会が認めた内容の活動

また、対象となる活動を2年以上継続して行われているか、短期間に大きく貢献したことも外部的評価によって明らかになることを条件としています。

今回の表彰式では同時に内閣府青年国際交流事業PRポスターデザイン募集で採用された、今大会実行委員でもある、藤井 花さん(平成24年度ヨルダン派遣)への表彰も行われました。



## ◇派遣報告

2 日目 11 月 23 日 (日) 9 : 30 ~ / ホテルミリオーネ ミリオーネホール

---

司会 : 近藤 麻子

### 1. 平成 25 年度 第 35 回日本・中国青年親善交流事業

団員 畠山 真次 渉外 小田玲実

#### 「私が教えてもらったこと」

10 日間で訪問した 3 都市 (北京・合肥・厦門) それぞれでの交流で、昨今の日中情勢を越えて友人となった中国の青年達から教えてもらった事を中心にご報告いただきました。

### 2. 平成 25 年度 第 20 回国際青年育成交流事業 ドミニカ共和国派遣団

団員 渡部 卓人

#### 「見えないもの」

Danilo Medina Sanchez 大統領への表敬訪問やハイチ共和国との国境に位置する二国間市場の視察など、内容に富んだ 3 週間のプログラムの中で気付かされたことについてご報告いただきました。

### 3. 平成 25 年度 グローバルリーダー育成事業

NL 西條 美雪

#### 「Let's go forward, and make the impact to have this world be a better place.」

グローバルリーダーとして社会に貢献すべく大きく成長し、それぞれの世界へと羽ばたいた参加青年たちの学びの軌跡を、ナショナルリーダーならではの視点でご紹介いただきました。

### 4. 平成 26 年度 第 13 回青年社会活動コアリーダー育成プログラム (デンマーク)

団員 高橋 麻美

#### 「デンマークの高齢者福祉を学んで」

福祉先進国と言われるデンマークでの視察内容、日本の課題と解決策、自分たちが目指すことなどについてご報告いただきました。

### 5. 平成 26 年度 第 28 回日本・韓国青年親善交流事業

団員 本間 麻友 長峰 園香

#### 「日韓の未来へ架ける다리(タリ)」

韓国語で「脚」と「橋」の意味があるタリ。スローガンをもとに、自らのタリ(脚)を運び、日韓交流のタリ(橋)をかけてきた派遣プログラムをご紹介いただきました。

## ◇事後活動報告

2日目 11月23日(日) 9:30~ / ホテルミリオナー ミリオナーホール

司会：近藤 麻子

### 1. 「他団体とのコラボ de つながる、ひろげる活動のWA!」

宮城青年国際交流機構

伊勢 みゆき、中鉢 博暁、赤間 玲美、田山 奈央子



宮城 IYEO では、若手役員の提案で「自分たちの地元である宮城県を知る」ため、今年度の受入れを見送りました。他団体とのコラボを通して、宮城県内の魅力を知ったり、新たなつながりが生まれたり、活動が少し広がりつつあります。東日本大震災の復興支援活動、コラボ活動について御報告いただきました。

### 2. 「～笑顔と元気を咲かせよう～ チューリップ花絵大作戦@ふくしま×にいがた」

船と翼の会ふくしま 菅野 裕子

新潟県青年国際交流機構 真嶋 祐樹



2013年三重での全国大会。「福島の子どもたちに笑顔届けたい」との一言から始まったチューリップ花絵大作戦。新潟自慢のチューリップでつくる花絵が2014年春福島に初上陸。

子どもたちはもちろん大人も笑顔になった、新潟県青年国際交流機構と船と翼の会ふくしま初のコラボ企画について御報告いただきました。



### 3. 「Global Citizens Camp@青森南高校」

青森県青年国際交流機構 木村 大輔、鴨居 智士

青森南高校で開催している global citizens camp は、普段の生活の中にある多様性に気づき、他者への理解の促進と個々のビジョンの共有を図り、将来の目標設定につなげることを目的としています。普段の活動では中々出会えないロールモデルとの対話や、欧米以外の外国人との交流等を通して、進路や違いに対する理解を深める他、ロールモデルがメンターとなり、進路への具体的なアプローチ、支援を継続的に行うことで、地域の高校生の殻を破り広い視野で物事を考え行動できる人材を育てます。この取組の実践について御報告いただきました。



## ◇閉会式

2日目 11月23日(日) 11:00~ / ホテルミリオーネ ミリオーネホール

---

### 1. 開会

- |           |                                    |       |
|-----------|------------------------------------|-------|
| 2. 挨拶     | 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室<br>青年国際交流担当参事官 | 矢作 修己 |
|           | 日本青年国際交流機構副会長                      | 高下 正晴 |
|           | 北海道青年国際交流機構会長                      | 小田 玲実 |
| 3. 大会旗引継ぎ | 高知県青年国際交流機構会長                      | 杉尾 智子 |
| 4. 閉会の言葉  | 第30回全国大会北海道大会実行委員長                 | 渡部 卓人 |



内閣府子ども若者・子育て  
施策総合推進室  
青年国際交流担当参事官  
矢作 修己



日本青年国際交流  
機構副会長  
高下 正晴



北海道青年国際交流  
機構会長  
小田 玲実



第30回全国大会  
北海道大会実行委員長  
渡部 卓人



## ◇地域理解研修① 札幌市中央卸売市場場外市場見学と

### 大倉山ジャンプ競技場リフト乗車体験

2日目 11月23日(日) 11:30~

●参加人数： 16名

担当：板倉 美穂子、鹿野 芽衣

●スケジュール：

12:00 ミリオナーズ

12:45 JR 札幌駅

13:00 昼食（場外市場）※毛ガニいくら丼

13:45 出発

14:00 大倉山ジャンプ競技場

15:00 出発

15:30 JR 札幌駅



北海道に来たら、新鮮な海鮮丼でしょう！ということで、旬のイクラとカニが、たっぷりのった丼、カニ汁、松前漬けの定食を「場外市場」でいただきました。札幌市の台所「中央卸売市場」の隣にあり、店先にタラバ、ホッケ、メロンなどの北海道の味覚が並んでいて、ついついサイフの紐をゆるめて、お買いものタイム。

そこから20分くらいで大倉山ジャンプ競技場へ。リフトに乗って標高307mにあるスタート地点へ行くと、札幌市内が一望に。幸い天候に恵まれ、最高の眺めでした。眼下は、レジェンド葛西選手も飛んだ、急勾配のジャンプコース。思わずゾクゾクします。11月の札幌でこんな快晴は、めったにあるもので無く、メロン味ソフトクリームが、いっそう美味しく感じられました。短い時間でしたが、札幌市内を周遊しました。

大倉山山頂にてソフトクリーム



ジャンプ競技場をバックに記念撮影





## ◇地域理解研修②

### 北海道の歴史に出会う旅～北海道開拓の村～

2日目 11月23日(日) 11:30～

●参加人数： 14名

担当：佐野 美恵子、岡田 朋子

●スケジュール：

- 11:30 ミリオナーズ発
- 12:45 開拓の村着  
昼食※開拓の村弁当
- 13:30 ガイドツアー開始 (2グループ)
- 14:20 ガイドツアー終了
- 14:30 開拓の村出発
- 14:45 JR 新札幌駅
- 15:30 JR 札幌駅



北海道開拓の村は明治から昭和初期にかけて建築された北海道各地の建造物を 54.2 ヘクタールの敷地に移築復元・再現した野外博物館。訪問者に開拓当時の生活を体感的に理解してもらうことと、文化の流れを示す建造物を保存し、後世に永く伝えることを目的に 1983 年 4 月に開村されました。村全体が展示であり、夏は馬車鉄道、冬は馬そりが走っています。

ガイドツアーは開拓の村の玄関口にもなっている旧札幌停車場(駅舎)から始まり、旧開拓使札幌本庁舎、旧副土家、有島家、松橋家などの明治の名家の珍しい建築を見ることができました。また、メイン通りでは旧武岡商店、旧武井商店酒造部など明治、大正の有名な商家、北海道の鉄鋼業が盛んだった時代の装蹄所や鉄工所の様子や理髪店や郵便局など開拓時代の生活がそのまま体感できる展示を見学しました。メイン通りの終わりには北海道で欠かすことのできない産業である漁業群の展示があり、その中でも鯨漁が盛んだった時代の名家、青山家漁家住宅はその規模の大きさ、そして鯨から油を取るための加工の展示など見応えがありました。

当日はかなり寒い日でしたが、参加者の皆さんは寒さに負けないくらい熱心に北海道の開拓の様子について説明を聞いていました。出発が遅れた影響で到着が 30 分ほど遅くなり十分な時間が取れなかったことが残念でしたが、参加者の皆さんからは「来てよかった」といった感想をいただき、有意義な時間を過ごせたのではないかと思います。



## ◇地域理解研修③

### 小樽運河（昼食）とニッカウヰスキー余市蒸溜所見学

2日目 11月23日（日）11：30～

●参加人数： 48名

担当：本田 光、田名邊 由美子

●スケジュール：

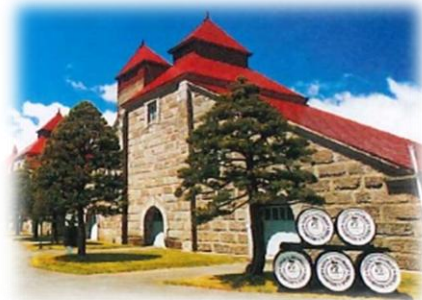
11:50 ミリオーネ発

12:45 昼食（小樽運河）※いくらサーモン丼

15:00 ニッカウヰスキー余市蒸溜所見学

16:45 JR小樽駅

17:30 JR札幌駅



小樽運河とニッカウヰスキーは、総勢50名の大人気のバスツアーになりました。11:50頃に全国大会の会場のある定山溪温泉を出発し、定山溪ダムや朝里ダムなど北海道の雄大な自然の景色を眺めながら、一路小樽へと向かいました。

小樽では、観光名所として有名な小樽運河に立ち寄り、「ポセイ井」で昼食をとりました。私たちが着いた頃、IYE0 御一行様が50席も貸切ってしまったため、ポセイ井には長蛇の行列ができていました。申し訳なく思いながらも遠慮なく、北海道の幸山盛りの“いくらサーモン丼”をみんなで頬張りました。

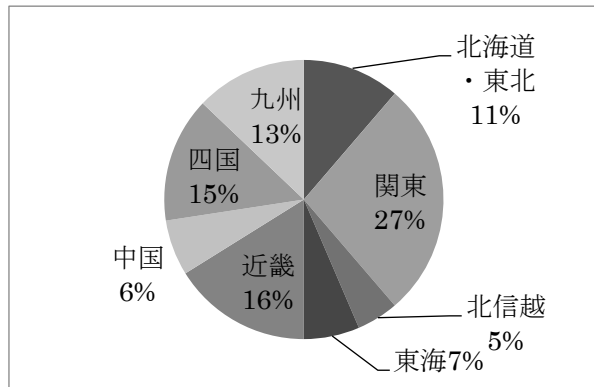
ニッカウヰスキー余市蒸溜所は、日本のウヰスキーの父とも呼ばれる竹鶴政孝が創設した余市にある蒸溜所です。そう、NHK朝の連続テレビ小説「マッサン」で話題沸騰の人気スポットです。一行は、ガイドのお姉さんの説明に耳を傾けながら約40分の工場見学と3種類のウヰスキーの試飲を堪能しました。各自お土産に好みのウヰスキーを手にして、一行は札幌へと帰りました。



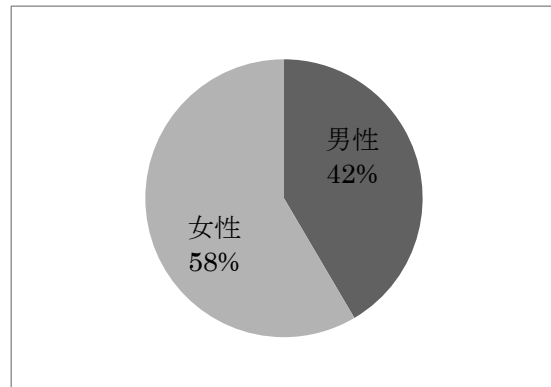
## ◇参加者アンケート

担当：畠山 真次

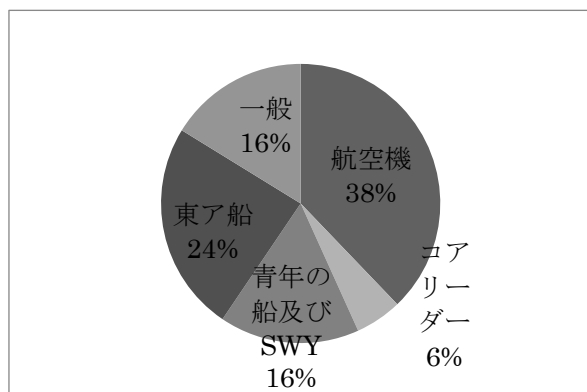
■ブロック別参加者比率



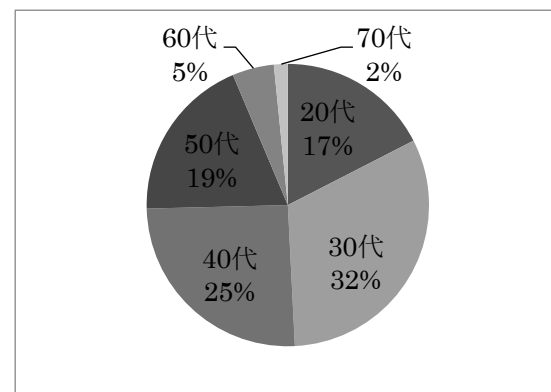
■男女別参加者比率



■事業別参加者比率



■年齢別参加者比率



■参加者コメント（アンケートより抜粋）

### <運営に関して（案内、受付など）>

- ・ 実行委員の皆さんが一生懸命大会成功のためがんばっている様子が嬉しかったです。温かい‘おもてなし’ありがとうございました。
- ・ 特に案内に関しては細かい部分までフォローされていてよかったです。
- ・ 受付は混雑しがちなので、担当者何名かで手分けして対応するとスムーズ。
- ・ 時間が押してしまった。

## ＜基調講演＞

- ・大変わかりやすい内容で、北海道について知る良い機会になりました。
- ・千石氏の事前学習をしていたので、特に講演を楽しく聞くことができました。
- ・NHK ドラマ「マッサン」も時代にあっているし、文化について幅広い話が面白かった。
- ・音響（マイクのエコーが効きすぎ？）の都合で聞きづらい部分があった。

## ＜分科会＞

- ・アイヌ文化を理解する良い機会となった上、「切り絵」体験も大変楽しかったです。ガイドして下さった方々が、アイヌの血を引いた方々と聞き、いろいろな話を直接聞けて感動しました。（分科会 A）
- ・「アイヌ」という民族は知っているものの、文様に意味があることや、アイヌの方々の暮らしぶり、近年の苦労なども知れて勉強になりました。（分科会 A）
- ・やはり「日本のトップランナー」の活動は素晴らしいと感じました。同様に雪やスキーに係る諸問題と抱える地域のスポーツ振興の参考になりました。（分科会 B）
- ・興味深い話ばかりで、引き込まれる内容だった。（分科会 C）
- ・仕事にも関連した話で学びが多かったです。（分科会 D）
- ・実際にエゾシカの角に触れて、アクセサリーを作ってみて、話を聞くだけでなく体験ができて良かったです。（分科会 F）
- ・若い人がハンターを目指していたり、動物が増えすぎたり絶滅しないようにデータを基に活動されているお話が良かったです。（分科会 F）
- ・楽しく知識を得ることができ、今後に活かせるものとなりました。（分科会 H）
- ・エコビレッジという概念に触れることができ、新しいライフスタイルのヒントとなった。（分科会 J）

## ＜懇談会＞

- ・全国物産展の御協力、本当にありがとうございました。このようなチャリティが各ブロックでも引き継がれ、各種支援につながればうれしいです。
- ・たくさんのお料理とエンターテイメントありがとうございます。エゾシカのお肉初めてでしたがおいしかったー。
- ・各テーブルに食べ物を用意していただき、楽しく話すことも食事もできてよかったです。

## ＜事後活動紹介＞

- ・各自のすばらしい発表が多くの人々の刺激になったことと思います。
- ・どの発表もそれぞれ素晴らしかったです！

## ＜施設や交通アクセス＞

- ・適度に生活圏から離れていてよい環境だったと思います。
- ・バスの車中時間も車窓を楽しめてあっという間に感じました。ホテルも広く快適でした。

- ・お風呂やダイニングなど広々していて気持ちよかった。ホテル側の対応が良かった。
- ・宿泊施設が中心部から遠いなと思いました。
- ・市街地より遠く宿泊費も高めのため、特に若い会員が参加しにくいのではないかと。

#### ＜その他、大会を通しての御意見・御感想＞

- ・若い北海道 IYE0 のメンバーたちが力を合わせて大会を盛り上げてくださっているのが印象的でした。大会開始前から交通案内等の資料を各人に送付するなど大変細やかなお心遣いに感心しました。
- ・予想していたよりも寒くなく、良いタイミングでの開催になったと思います。この機会を与えていただいた実行委員をはじめ、すべての皆様に感謝いたします。
- ・スタッフの皆さんがキビキビ動いていたことと人数が多かったので、とても行き届いていたと思います。また分科会、基調講演がテーマと関連性がありよく作りこんでいるなと思いました。まさに皆さん自体が「共生」を実践していると感じました。
- ・プログラム内容も北海道の自然や風土、文化をうまく取り入れられてとても良かったです。

**共生のフロンティア北海道**  
～次世代につなごう道産子スピリッツ～



**全国大会 2014**  
**北海道 IYEO**

北海道 IYEO Facebook ページもご覧ください

